一人一人に寄り添った防除で所得向上を

―― 和歌山県 JAわかやま ながみね地域本部

気候変動の影響で異常気象が頻発するなか、従来どおりの栽培・管理方法が通用しにくくなっている。ミカン園地で起きている個々の農家の困り事に、磨いた知見とみずから収集したデータで向き合ったTAC（地域農業の担い手に出向く担当者）がいる。「TAC・出向く活動パワーアップ大会2025」のTAC部門で最高位に輝いた、その人の奮闘に迫る。

前田博史＝写真　*photo by Hiroshi Maeda*　JA全農TAC・営農支援課＝企画協力



前山さんのミカン蔵で撮影。左からJAわかやまの前山課長、農家の前山さん、同JAの土谷さん、農家の中尾さん。農家の二人は土谷さんを「話し上手で、フットワークが軽い」、前山課長は「後輩職員を引っ張る存在」と評した

和歌山県北西部に位置する下津地域の特産品といえばミカンだ。なかでも「蔵出ししもつみかん」は貯蔵熟成ミカンとして知られ、昨年には有田地域とともに世界農業遺産に認定された。四〇〇年以上にわたり受け継がれてきた技術のたまものだが、いま栽培・管理方法に変化が求められつつある。

「農家からの問い合わせが多いのは病虫害。近年、気温の上がり始めが早い一方、下がり終わりは遅くて、従来どおりの時期に防除すると、ストライクゾーンを外してしまいます。気候の変化に合わせて頭の切り替えをしていく必要があるのです」

そう語ったのは、JAわかやましもつ営農生活センター主任の土谷賢太郎さん（40）。農薬メーカーや県の果樹試験場と連携し、薬剤の試験研究を年一〇回以上実施。それぞれの特性を把握し、農家からの相談に根拠を持って回答するよう心がけてきた。

「近隣の農家が褒めていたからと同じ薬剤を使おうとする人には病気の風邪にたとえるんです。『病院に行って症状を伝えたあと、前の人と同じ薬をくださいとは言わないですよね』って」

年一〇回以上開催する「かんきつ塾」や、毎月発行される営農情報誌などを通じて、情報を惜しみなく伝えてきたが、園地によって課題は異なる。個々の農家にもっと寄り添ったサポートはできないか。そこで始めたのが、データを活用した個別防除処方箋の作成である。

個別防除処方箋の結果

土谷さんが同JAながみね地域本部営農経済部購買課課長の前山香好さんと、前山琴美さんのミカン蔵を訪ねると、農家仲間の中尾恵子さんとともに出迎えてくれた。二人が土谷さんと知り合ったのは五年前のこと。当時、前山さんは栽培方法を学んだ他地域の農家が勧める薬剤を用いていたという。

「うちには合っていないかもと思っていたとき、防除提案を受けました。やってみると秀品率が向上し、所得も上がったのです。そこで資材の購入先を商系からJAへと切り替えました」

中尾さんは、就農するために家に戻ってきた息子を介して土谷さんと出会い、園地にある課題を見つけてもらったと話す。

「以前から味のよさを追求して栽培してきましたが、樹を痛めていたようです。施肥量などの見直しを提案され、試してみると収穫量も品質も向上し、所得が上がっています」

一人一人に合った提案だから安心できると称賛する二人。前山課長も、「地域には土谷ファンが多いんですよ」とつけ加える。土谷さんが照れつつも答える。

「とくに二人は素直な方で、まずは一回やってみてくれる。うまくいかないと『だめだ』と伝えてくれるので、自分が解決すべき次の課題がみえるんです」

地域の農家を対象にアンケートを実施したところ、きめ細かな指導がJAへの信頼、ひいては利用率向上に貢献していることがわかった。土谷さんは言う。

「営農を基礎に、購買や販売の事業まで携われるのが強み。農家の所得向上をめざし、指導に当たれる今の仕事が好きです」

四人に笑顔の花が咲いた。

活動の根幹には現場の課題がある

下津地域には営農指導員とTAC（出向く活動担当者）を兼任する職員4人が配置されている。前山課長は「土谷さんを筆頭に自主性を持ってやってもらっています。組合員の方々には現場の課題を教え、わたしたちを育ててほしい」と話す。玉置専務も、「組合員の期待に応える土谷さんは、他の職員のよい見本。組合員の方々も、わたしたちにたくさん相談してください」と力強く語った。





「SNSなどが発達した今も組合員の方々からの営農指導への期待は大きい」と語るのは、同JAで代表理事専務を務める玉置友博さん。「合併直後の2025年度は営農指導事業の体制整備に注力してきました。26年度からは取り組み強化にさらに力を入れる予定です」と続けた



山の斜面に階段状にミカン園地が広がる有田・下津地域では、江戸時代から農家が石積み階段園を築き、貯蔵技術を駆使して、安定出荷を実現。一連の仕組みが評価され、「石積み階段園みかんシステム」として世界農業遺産に登録された

「蔵出ししもつみかん」は12月に収穫した果実を木造・土壁の蔵で貯蔵。自然の力で甘みを増した状態で、1～4月にかけて出荷する。「何十年も営農してきた農家に比べれば、営農指導員はひよっこ。だからこそ園地に出向いて、技術を身に付けないと」と土谷さん

伝えられて初めて生きる営農技術

営農技術を磨くことはもちろん、伝える努力も重ねている土谷さん。40年以上前から続く地域密着型の営農情報誌『からたち』に、病害虫防除を題材にコラムを毎月連載。前山さんいわく「農家は土谷さんのコラムから読み始める」。中尾さんは「たとえ上手でおもしろい」と語る。昨年10月にハナアザミウマが突然発生したさいには、農家からの情報をいち早くキャッチし、LINEやメールなどを活用して被害拡大を防いだ。



JAわかやま

2025年4月に和歌山県内の旧8JAが合併して発足。県内栽培面積のうち約6割を占めるのが、ミカン、ウメ、カキ、モモといった果樹である。地域によっては水稲のほか、ショウガ、エンドウなどの野菜、スターチスなどの花卉類の栽培も盛ん。13年からTAC（出向く活動担当者）を設置し、38人（うち専任10人、兼任28人）を配置。

真摯な取り組みが好循環を生む!



JAわかやまのウェブサイト

イラストはJA全農TAC・営農支援課と地上編集部によるコラボキャラクター「TACマン」

TACについての詳しい情報は、JA全農HPのTAC紹介ページまで（https://www.zennoh.or.jp/tac/）

［じっくり話し合おう］異常気象が営農にどのような影響をもたらしていますか。TACに現況を伝え、意見を求めてみよう

TAC 未来を見つめる 担い手とTAC

このコーナーでは、地域の担い手とTACが"未来の農業"のために取り組む活動を、全国のみなさんにお届けします